

# 今までの検討

今回で検討した柱梁接合部の組み合わせでは、  
接合部と梁の降伏耐力比はバラバラで、  
 $M_{jy} \neq M_{by}$ とした設計があまりにも安全側となるパターンが出てきた。

$M_{by}/M_{jy}$  の検定

↵	柱剛↵	H-300x300↵	H-390x300↵	H-440x300↵	H-488x300↵	↵
H-396x199↵	0.63↵	0.69↵	0.63↵	0.63↵	0.63↵	↵
H-400x200↵	0.73↵	0.80↵	0.73↵	0.73↵	0.73↵	↵
H-446x199↵	0.71↵	0.78↵	0.71↵	0.71↵	0.71↵	↵
H-450x200↵	0.82↵	0.90↵	0.82↵	0.82↵	0.82↵	↵
H-496x199↵	0.84↵	0.93↵	0.84↵	0.84↵	0.84↵	↵
H-500x200↵	0.94↵	1.04↵	0.94↵	0.94↵	0.94↵	↵
H-596x199↵	0.95↵	1.05↵	0.95↵	0.95↵	0.95↵	↵
H-600x200↵	1.06↵	1.18↵	1.06↵	1.06↵	1.06↵	↵

スプリットティを一種類で統一しました、というカタログを作るのではなく、  
 $M_{jy}$ と $M_{by}$ の耐力比を統一して、剛性接合部のモーメント回転角関係を整理した  
スプリット形式柱梁接合部のカタログを提案することが考えられる。